

夕方になってから小銭入れの無いことに気がついた。所在を探るが容易には見つからない。前夜遅くまで飲み歩き、酔って立ち寄った遠くのコンビニで使ったのが辿れる記憶の尻尾にあった。ほぼ一日を経てコンビニを訪ねると、レジの奥からくだんの小銭入れが現れた。思わず「うおおお」と叫んだ声に、同行した娘が「声が大きすぎ」と恥ずかしげに呟いた。「さすが日本は違うな」と独りごち、俗臭にまみれた日本観が笑顔とともに後ろから追いかけてくる。

さて、熱のこもった論考や画像をお寄せくださった執筆者各位に深く感謝する。本号の編集長は何もしなかった。粗忽の極みである。したことといえば、論証の進め方も専門分野によっては流儀の異なることを目の当たりにし、異なる学問分野の相互交流から内容・方法の浸潤へと至る姿を思い描きながら、ほんやりとしていただけであった。本号は、はじめからしまいまで、「アジアの中の日本文化」研究センター長と編集委員会委員および若きアシスタントたちの奮闘によって、創り上げられたのである。深く頭を垂れて謝意を表する次第である。